

生涯学習研究所だより



目次

- 所長挨拶 ————— 2
一緒に「生涯学習」「地域連携」を学び、
実践を!
- 平成26年度 生涯学習研究所の取り組み — 3
生涯学習研究所が一年間取り組んできた
研究・実践活動をご紹介します
- まつどの未来を考える ————— 4～5
- 明日のまつどを創造する! ————— 6～7
まつど社会教育フォーラム報告
- 運営委員を紹介します ————— 8～11
- アートパーク7 ————— 12
みんなゲイジユツ化宣言



一緒に「生涯学習」「地域連携」を学び、実践を!

聖徳大学 生涯学習研究所長 長江 曜子



昨年9月より、福留強初代所長の後任として、生涯学習研究所長に就任いたしました長江曜子です。前所長同様よろしくお願い致します。

聖徳大学は、より広く地域に貢献することの出来る大学となるため、川並弘純学長をトップに、平成26年度より「聖徳大学生涯学習社会貢献センター」のセンター長に増井三夫副学長が任にあたり、その下に「生涯学習研究所」が位置付けられました。21世紀の日本社会の課題である「少子・高齢社会」における、「地域創生」の研究拠点としての役割を担っていきます。

同年度は、地元松戸市の教育委員会からの委託事業「松戸市社会教育計画策定支援業務」を受託し、研究を進めています。聖徳大学の強みである、大学6学部、短期大学部2学科の幅広い教授陣の協力の下、8月には行政・大学・市民・NPO・企業が参画したワークショップを、10月のまつど社会教育フォーラムでは千葉大学大学院園芸学研究科木下勇先生による基調講演と分科会を通して、「産官学民」を交えた広い意見を盛り込んだ画期的な「社会教育計画策定支援策」を創り上げることが出来ました。

また従来の、茨城県南部各市町村、千葉県白井市、埼玉県八潮市、栃木県佐野市からの、視察・見学・研修の受け入れ、地元千葉大学(園芸学部)、流通経済大学との連携等に、力を入れてまいります。ぜひ、松戸駅東口徒歩1分70メートルのビル10号館6階の当研究所にお越しください。一緒に「生涯学習」「地域連携」を学び、実践いたしましょう。

平成26年度 生涯学習研究所の取り組み

生涯学習研究所が一年間取り組んできた研究・実践活動をご紹介します



主催事業

4月

【課題別研究会】

社会貢献活動の一環として、大学が有する知的財産ならびに研究成果を広く地域社会に還元し、研究員(本学教員)、専門家および一般市民が、多様化する地域課題について意見交換を行い、さまざまな視点で地域課題を研究しました。

- A 「高齢化社会支援を考える
～素敵なエンディングを考える～」
生涯学習研究所長、児童学科教授 長江曜子
- B 「家族と共に地域に生きる要支援者、要介護者
(インタビューダイアログ)～自身が認知症患者である活動家から学ぶ「人間としての意地」～」
文学科教授 西村美東士
- C 「生涯学習の成果発表をまちの活性化に結び付ける方策を考える」 児童学科教授 天野勤
- D 「アートでまちを面白くする方法」
児童学科准教授 大成哲雄
- E 「パパ出番ですよ!パート2～子育てに父親が必要な時～」 児童学科准教授 神谷明宏
- F 「シニアパワーを子どもに活かすために」
児童学科准教授 齊藤ゆか
- G 「安心・安全なまちづくり」
短期大学部総合文化学科准教授 藁輪裕子
- H 「キャリア教育と地域・NPO」
児童学科講師 上田智子

7月

【アートパーク7～みんなゲイジユツ化宣言～】

聖徳大学・聖徳大学短期大学部と地域の子育て団体やまちづくり団体、行政が協働し実施しました。学生と地域子どもたちが、アート=あそびを通してふれあい、参加者みんなの笑顔がはじける一日となりました。

8月

【松戸市社会教育計画策定支援事業】

松戸市と聖徳大学・聖徳大学短期大学部の連携協定の一環として、聖徳大学は平成27年度からの松戸市社会教育計画策定の原案作成に関する支援依頼を受託しました。

行政と大学の協働により、市民の声を幅広く聞き、本学生涯学習研究所の特色を生かし、今後の松戸市社会教育計画案を策定しました。

【まつどの未来を考える ～松戸市社会教育計画策定支援に向けたワークショップ～】

「社会教育を考えるスモールプランコレクションづくり」と題して、松戸市各種団体連携研究会・ワークショップを開催しました。

5日間、9テーマに分かれて、松戸市社会教育に対する評価・現状把握・問題点を分析し、今後の松戸市の在り方を協議しました。総計70名が参加して、白熱した議論が繰り広げられました。

10月

【明日のまつどを創造する!～まつど社会教育フォーラム～】

松戸市教育委員会との共催で2日間開催しました。初日は、4つのテーマに分かれての討議、2日目は、千葉大学園芸学研究科木下勇教授による「子どもにやさしいまちづくり」の講演会が開催されました。

12月

【みんなで楽しいクリスマス★】

松戸市内の子ども館にて、学生とNPOスタッフが地域連携事業イベントを開催しました。大勢の参加者が楽しい時間を過ごしました。

3月

【子どもの放課後活動を支援するには～冒険遊び場指導者の経験から】

日本初の冒険遊び場の開設当初から関わってきた天野秀昭特命教授(大正大学)の講演会を開催。松戸市で冒険遊び場を実現する可能性について考えました。



共催・協力事業

9月

【芸術士と語ろう～子どもたちの創造性を育む文化芸術の役割について～】

10月

【第41回松戸まつり～笑顔でつなく やさシティまつど。～】

2月

【全国学びとまちづくりフォーラム in 佐野】

3月

【ミニまつぶし2015】

まつどの未来を考える

「社会教育を考えるスモールプランコレクションづくり」

～松戸市社会教育計画策定支援に向けたワークショップ～

松戸市社会教育計画策定支援の一環として8月29日(金)～31日(日)、9月22日(月)、23日(火)の計5日、松戸市各種団体連携研究会・ワークショップを聖徳大学生涯学習社会貢献センター(聖徳大学10号館)にて開催しました。各種団体のメンバーが一堂に会し、松戸市の現状や、各テーマの課題を共有し、社会教育事業の具体案の作成及び提案につなげることを目的としたものです。産学官民それぞれの立場から総計70名の方々が参加して、活発な意見が交わされました。

開催に先立ち、伊藤純一 松戸市教育長が挨拶



内容

- ①講義：松戸市の社会教育の現状(松戸市教育委員会 生涯学習部社会教育課課長 海老沢健司)
- ②提言書の説明(名誉教授 福留強)
- ③日本の生涯学習をめぐる情報(児童学科准教授 齊藤ゆか)
- ④各テーマに分かれたワークショップの実施
- ⑤テーマごとの発表
コーディネーター 齊藤ゆか

テーマ(9分野)

- ・アート・文化グループ
(担当：児童学科教授 大成哲雄、参加者9名)
- ・共生社会(障がい者)グループ
(担当：短期大学部総合文化学科准教授 蓑輪裕子、参加者4名)
- ・高齢者グループ
(担当：児童学科教授 天野勤、参加者9名)
- ・国際交流グループ
(担当：名誉教授 福留強、参加者7名)
- ・女性・勤労者グループ
(担当：児童学科講師 上田智子、参加者7名)
- ・情報提供相談グループ
(担当：文学科教授 西村美東士、参加者7名)
- ・青少年グループ
(担当：児童学科准教授 神谷明宏、参加者9名)

- ・不登校ひきこもりグループ
(担当：短期大学部保育科准教授 檜垣昌也、参加者6名)
- ・産学官民連携グループ
(担当：生涯学習研究所長、児童学科教授 長江曜子、参加者8名)

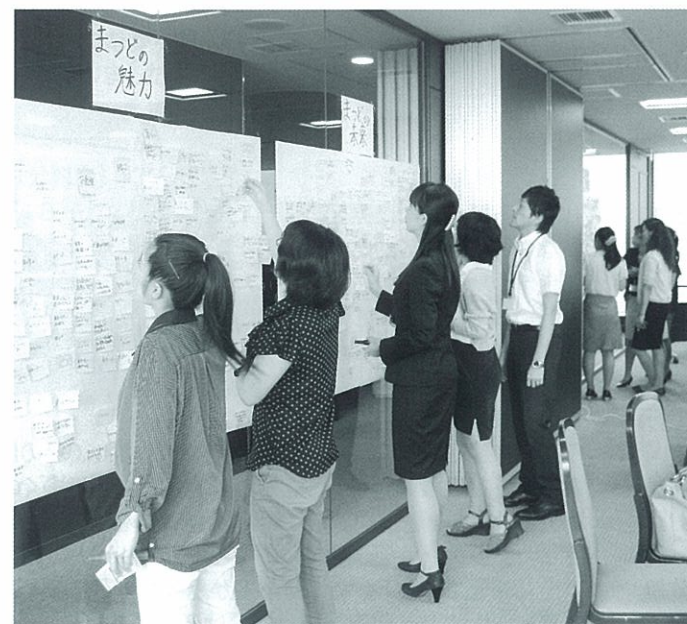
各グループでは、活発な意見が交わされ、チャートを作成しました。その後、市民の皆様からいただいた貴重なご意見を発表するため、作成したチャートをもとに、テーマごとの内容に関連したポスターセッションを2階ギャラリーにおいて開催しました。
(全事務担当 助手 有川かおり)



日本の生涯学習をめぐる情報(齊藤ゆか)



テーマごとの発表



まつどへの「期待」「夢」「希望」を出し合うとともに、まつどの「問題」を話し合い、共有しました。



課題と目標

| | | |
|---|--|--|
| <p>アート・文化グループ</p> <p>「アートパーク」が開催され、アートが身近になってきている松戸。今後は、市民を巻きこんだ展開をし、コーディネーター育成もしていくべきではないか。そして、「暮らしの芸術都市」づくりを実現するため、松戸に「文化をつくる」活動を行っていききたい。</p> | <p>共生社会(障がい者)グループ</p> <p>課題として、公共機関のバリアが残っていること、障がい者に対する理解が不十分なこと、障がい者が参加できる、参加したい学習内容の充実があげられる。共生社会の考え方を広め、超高齢社会のよりよい担い手づくりをし、すべての人々の生きる力を高めていきたい。</p> | <p>高齢者グループ</p> <p>自然や史跡が残り、病院が多いことはまちとして魅力があるが、高齢化が進み若者離れが進んでいる。これからは、社会教育を通じて健康寿命をのばし、地域を愛し地域で助けあう、市民誰もが暮らしやすい松戸市を目指したい。</p> |
| <p>国際交流グループ</p> <p>国際交流団体同士の交流の場をつくり、教育現場とも連携してイベントを行ったり、国際的ホットラインがつけられるかが課題となる。国籍、出身地に関係なく、だれもが文化、個性を發揮できる第2の故郷といえる国際都市・まつどを目指したい。</p> | <p>女性・勤労者グループ</p> <p>女性には子どもの年齢や家族の変化に伴い直面する問題が、男性には退職後に家族や地域との関係作りで直面する問題などがあるが、世代間の交流や助け合いが不足しているためと考えられる。「さまざまなライフステージの男女が、それぞれ輝き、助け合える松戸市へ！」をコンセプトに、世代を越えた助け合いを育てていきたい。</p> | <p>情報提供相談グループ</p> <p>距離と親密の二律背反がネットでも再現されており、基本的信頼に基づく交流の促進が必要である。異世代・異民族・異学校の市民が学びあい、支え合うグローバルICTシステムを開発したり、学びあい支えあえるネットコミュニティを創出していききたい。</p> |
| <p>青少年グループ</p> <p>子どもの居場所が少なく、子どもの参画という視点に立って各団体が協力、連携することができていない。また、青少年自身が社会参画できる機会が少ない。地域の学びを支え、将来の地域の担い手になり得る青少年が参画し、地域づくりをする事業を開発したい。</p> | <p>不登校ひきこもりグループ</p> <p>当事者が求めていることを知り、人とのつながりをつくり、勉強したいときにいつでも学べる環境をつくる必要がある。一般の方が理解する機会をつくることや、親の経済的負担も課題である。これからは、自尊心を得られるような教育や、自力で生活を営み社会とつながることのできるような生活訓練をし、幸せに生きるための社会教育の実現をめざしたい。</p> | <p>産学官民連携グループ</p> <p>産学官民いずれの立場においても、他のセクターと連携を図るための窓口がなく、協働に課題が多い。連携を促進するコーディネーターの育成や窓口の設置、交流会や懇親会の実施を通して、子育て環境の充実をはかり、地域ブランドの確立を目指していききたい。松戸市内4大学(千葉大園芸学部、聖徳大、日大松戸歯学部、流通経済大)の連携促進と大学コンソーシアムへの研究もすすめていきたい。</p> |

■日時：平成26年10月11日（土）13：00～15：00／平成26年10月12日（日）10：30～12：00
 ■会場：聖徳大学生涯学習社会貢献センター（聖徳大学10号館）
 ■主催：聖徳大学、聖徳大学生涯学習研究所

10月11日（土）、12日（日）の2日間、松戸市教育委員会と共催で「明日のまつどを創造する！～まつど社会教育フォーラム～」を開催しました。

11日の分科会は、4つの会場に分かれて、「共に生きる社会に向けた生涯学習とは」、「インターネットを通した学びあい・支えあい・出会いの仕掛けづくり」、「アートでつなぐひと、まちづくり」、「持続可能な体験の場・居場所づくり」の題目で行いました。松戸市内で活躍している社会教育関連団体の方々、人文学部生涯教育文化学科の卒業生を中心としたメンバーが登壇し、社会教育・生涯学習の観点から松戸市の未来をお話いただきました。

12日の講演は、千葉大学大学院園芸学研究科の木下勇教授をお招きし、「子どもにやさしいまちづくり」というタイトルで行いました。木下先生は、ローカルな実践活動を重視した、様々な子ども参画のまちづくりを展開されており、松戸市小金地区をはじめ、被災地の三陸での復興まちづくりや、世田谷区三軒茶屋での三世代遊び場マップづくりなど、現場に足を運び、面白さと課題を同時に読み取っていらっしゃいます。そして、国際経験も豊富で、フランス、ドイツ、インドネシアなど、子ども参画の取り組みをグローバルな視点から紹介して下さいました。参加者からは、「子ども参画のまちづくりを、松戸市でも実現してほしい」、「世代間交流によって、地域が良くなれば良い」等のご意見をいただきました。

今回、新しい試みとして、8月下旬から9月中旬にわたって実施した、社会教育に関するワークショップの内容を展示しました。こちら、大変好評をいただき、フォーラム終了後も延長して展示を行いました。

両日とも、参加者の皆様から好評をいただき、無事に終了することができました。今回の成果を活かして、さらに地域連携に力を入れていきたいと思っております。

●各分科会

【第1分科会】「共に生きる社会に向けた生涯学習とは」
 講師：井上たか子（千葉県松戸特別支援学校 校長）
 元山幹雄（バリアフリーまつど市民会議 代表）
 桑田久詞（松戸市基幹相談支援センター）
 コーディネーター：養輪裕子（聖徳大学短期大学部総合文化学科 准教授）

報告：井上たか子氏からは、学校間・地域間交流の取り組みの紹介がありました。在校生は、同世代と接することをとても楽しみにしており、交流は双方にとって大きな意義があるが、一方で、卒業後の交流や社会教育の場が不足していることが課題とされていました。



元山幹雄氏からは、視覚障がい者の生活や、趣味で彫塑を

している話があり、見事な作品を見せていただきました。市内のふれあい22では、さまざまな障がい者が互いに協力し、書道や編み物等、多様な趣味を楽しんでいるそうです。

桑田久詞氏からは、ひきこもりの若者について、その原因やあるべき社会像の話がありました。現代社会では多くの若者が生きづらさを感じています。多様性を認め合う、若者にもやさしいまちづくりが必要とされていることがわかりました。

全体を通して、障がいのある人が豊かな学びを楽しんでいることがわかりました。一方、現在はその機会がまだ十分ではないようです。そこで参加者からも国内外の先進例の紹介があり、将来像を考えることができました。（文責：養輪）

【第2分科会】「インターネットを通した学びあい・支えあい・出会いの仕掛けづくり」
 講師：榎原直哉（コミュニティサイト松戸ラブマツ 主宰）
 秋戸巴美（東京都板橋区 社会教育指導員）
 コーディネーター：西村美東士（聖徳大学文学部文学科 教授）

報告：最初に、ネットには24時間接続と拡散の良さがあり、チラシには手渡しして口コミができるという良さがあるという前提が確認されました。



ネットの問題としては、1 ネットいじめ（いやだったら出ていけばいいじゃん）、2 ヘイトスピーチ（人種差別等の憎悪の増幅作用）、3 繊細チンピラ（上げ足をとるなど）、4 鬱イートの垂れ流し（死にたい、やりたくないなど。見ている人も暗くなる）、5 他者の個人情報平気で流す人（職業上知りえたことをつい流してしまう）などが確認されました。これらの問題に対して、松戸ラブマツは、「人々が支え合ってまちをつくる社会教育活動」として、鮮やかに対比されることが明らかになりました。

板橋区社会教育活動においては、「チラシ置きだけではなく、児童館で親に手渡し」などの事例から、「顔が見える安心感」や「紙ベースの良さ」などの効果が明らかにされました。また、「役所のホームページはなかなか見てもらえない」などのことから、ヒップホップのクラブの告知の事例の紹介とともに、「巷では5W2Hより写真が重要」という指摘がありました。

全体を通して、社会教育においては、新旧メディアを有効に



使うということ以上に、学び合いと支え合いのために「顔の見える」人々のつながりを、どのように作るかが重要であることが明らかになりました。（文責：西村）

【第3分科会】「アートでつなぐひと、まちづくり」
 講師：庄子沙（松戸まちづくり会議 事務局）
 榎本孝芳（NPO法人クリエイティブまつど工房 理事長）
 青木伸子（じゅんぴしつ）
 コーディネーター：大成哲雄（聖徳大学児童学部児童学科 准教授）

報告：3人のパネラーから「暮らしの芸術都市」などの市内で取り組んでいるアート活動を紹介していただきました。「アートをまちづくりに用いる事で地域の良さを発見できる」「様々な見方やチャンネルが生まれることで文化的に豊かな暮らしに繋がる」「市民がプロジェクトに関わる事で成功体験を積むことができる。その体験がまちを元気にしていく」といったような意見交換がされました。



今後は、教育機関との連携や、アーティストの活用、アートプロジェクトをリードしていく人材育成、「そもそもアート、文化とはなにか?」といった議論を市民としていく必要があることが課題としてあがりました。（文責：大成）

【第4分科会】「持続可能な体験の場・居場所づくり」
 講師：三浦輝江（NPO法人子どもの環境を守る会 Jワールド理事長）
 石川静枝（NPO法人子育てさぼーとハーモニー 副理事長）
 鈴木葉子（NPO法人i-net 保育士）
 コーディネーター：神谷明宏（聖徳大学児童学部 児童学科 准教授）

報告：まず、各講師より15分ずつ各々の所属団体の活動について紹介していただきました。

石川氏は公設民営の児童館「野菊野こども館」での活動と本年度新たに21世紀の森で月1回開設している「森のこども館」での活動についてお話しされました。ここで強調されたのは、子どもたちの発想を具現化する活動においては大学生をはじめとする大人の協力者の存在が重要であり、さらにその協力者を通して活動の意義を社会に発信することが必要であるということでした。

三浦氏は中高校生の居場所である「ゆうスペース」を中心に乳児から保護者までが共にくつろげる場とそれを支える大人の関わり方の重要性についてお話しされました。その中で、特に一緒に食事をすることや、彼等の持っている力を引出し社会資源として活用することが「ゲット・ユア・ドリーム」として結実し、県立高校の家庭科の「ライフプランニング」の授業に発展していることを例に挙げてお話しされました。

鈴木氏は保育園活動の一環として都市の中外部公園を活用した自然体験活動をテーマに活動している「森の幼稚園」についてお話しされました。浦安という都市化現象のすずまちで、子どもたちの体験不足から危機管理能力の欠如や自己肯定感の低さを懸念する保護者の声によって課題解決の方法としてはじめられた活動であるが、その中で、子どもの思う森と大人の思う森のイメージの違いに気付いたことから、街の中でもさまざまな直接体験が可能であると分かり、現在活動幅を広げていっていることを紹介されました。

この後、フロアの方々との意見交換の中で分科会として次のまとめを行いました。

1. こどもにとって家庭以外の居場所の存在は重要である
2. 0歳～18歳のこどもとその環境に関わる大人の連携が求められている
3. 行政のできないNPOならではの活動があるので、行政は対等なパートナーシップを大切に考える



《講演・子どもにやさしいまちづくり》
 講師：木下勇（千葉大学大学院園芸学研究科 教授）

千葉大学大学院園芸学研究科 木下勇教授をお招きし、「子どもにやさしいまちづくり」と題して講演していただきました。



《参加された皆様からの声》

本フォーラムにおいて実施したアンケートからの抜粋です。お寄せいただきましたご意見を今後の活動に活かしてまいります。

- 【分科会】
- ・発表内容が良かった。地域で活動する人々が多くなることを望んでいます。
 - ・また機会があったら参加したい。地域と接点。
 - ・より多くの市民に関わり、意見を出せる場がもっと作れると良いと思います。
- 【講演】
- ・子どもたちのすこやかな成長を中心にしたお話でとても今後の松戸に期待しています。
 - ・昔の子ども頃の遊び方と、今の子ども遊び方が世の中の変化で変わってきた様子がわかった。
 - ・もっともっと地域と連携して社会貢献センターの名に恥じない活動をして頂きたいと思います。期待しています。

運営委員を紹介します

(順番は職位及び五十音順)



長江 曜子

(児童学部 児童学科 教授)

1. 専門の研究について教えてください。
・少子高齢社会研究(都市計画としてのお墓の研究)
・日本近代文学(宗教と文学、女性文学研究)
・葬送文化研究(日本・世界)
2. 主な所属学会を教えてください。
(社)日本建築学会、(社)日本都市計画学会、
(社)日本造園学会、日本生活文化史学会、日本近代文学学会、日本葬送文化学会、火葬研究協会他
3. 今、一番力をいれて取り組んでいることは？
人間としての「生命の大切さ」を伝えることの出来る、葬送文化・追悼としての墓地研究とデスクアサービスの研究。
「死にがいのあるまちづくり」を考えた21世紀型都市計画。
4. 生涯学習研究所で取り組んでいきたいこと。
人間が、生涯学び続けることで真の「幸福」を得ることの出来る、生涯学習に関する研究とまちづくりの実践プログラムの開発のための研究に取り組みたいです。



西村 美東士

(文学部 文学科 教授)

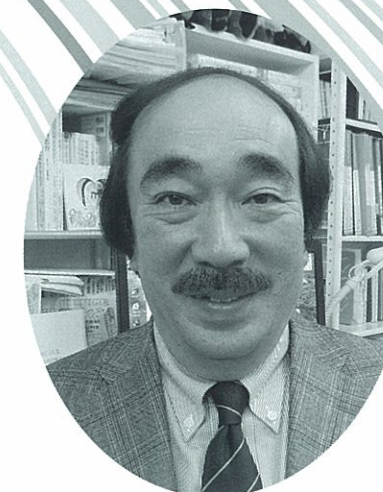
1. 専門の研究について教えてください。
社会教育 青年教育 キャリア教育
暗黙知教材の開発 子育てのまちづくり
2. 主な所属学会を教えてください。
日本生涯教育学会 日本社会教育学会
日本子育て学会 日本産業教育学会
3. 今、一番力をいれて取り組んでいることは？
個人化と社会化の一体的支援としての社会教育
社会開放型子育て観への転換
生涯発達論における癒し機能の再評価
若者の職業の場、家庭の場、地域の場での充実のための青年教育
4. 生涯学習研究所で取り組んでいきたいことは？
市民参画による研究活動の推進。
生涯学習研究所は、市民と大学教員とのコラボによるまちづくり研究の拠点として、今後の生涯学習社会において、社会が求める未来像を提示する役割をよりいっそう発揮するものと確信しています。



大成 哲雄

(児童学部 児童学科 准教授)

1. 専門の研究について教えてください。
美術教育(アートプロジェクト・造形ワークショップ)
2. 主な所属学会を教えてください。
大学美術教育学会 美術科教育学会
3. 今、一番力をいれて取り組んでいることは？
松戸の暮らしの芸術としてのアートプロジェクト
➡いろいろな人とつながって、垣根をなくし、アートをやることに興味があります。
今までの活動としては、...
お米屋さんプロジェクト(空き店舗を利用する。学生がおにぎり部をつくって)、デコデコチャりんこ(常盤平団地でデコチャリを走らせる)、ライトドローイング(夜の公園をライトアップ)、つながる洋服プロジェクト(保育園児と学生がどこかつながっている服を共同で考えて、ファッションショーを開催)、きのこロボット THE MOVIE(アートパークで活躍した大きな段ボールのきのこロボットを使って、保育園児と一緒に映画の予告編を制作)等。
4. 生涯学習研究所で取り組んでいきたいこと。
・アートパークを継続していきたい。
子どもには思いっきり楽しんでもらって、大人には、普段あまりみることのできない、子どもがアートを創り上げていく過程や、その表情をみてほしいです。
・生涯学習研究所は、地域への窓口としての役割がより果せたら良いと思います。



神谷 明宏

(児童学部 児童学科 准教授)

1. 専門の研究について教えてください。
・グループワーク
・野外教育活動
2. 主な所属学会を教えてください。
・こども環境学会
・玩具福祉学会
・野外教育学会
3. 今、一番力をいれて取り組んでいることは？
松戸市の放課後児童クラブ・児童館等の子どもたちの放課後活動支援について。
4. 生涯学習研究所で取り組んでいきたいこと。
高齢化社会が進んでいく中、何より大切にしないでほしいのが、次代を担う子どもたちの育成だと考えます。私が勤務していた「こどもの城」は、仕分けという名のもとに役目を終えたと判断され、閉館になりました。これは、子どもを大切にする社会のありようとして、いかがなものかと思えます。今一度、子どもたちが何を望んでいるのか、大人たちは考えていかねばならないのではないのでしょうか。聖徳大学は、保育・幼児教育の分野で長い歴史を積み重ねてきました。生涯学習研究所を、「保育の聖徳」の歴史を基盤とし、子どもの問題を社会に問い発信し続ける場にしていきたいと考えています。



齊藤 ゆか
(児童学部 児童学科 准教授)

1. 専門の研究について教えてください。

専門分野：
ボランティア、NPO、生涯教育学。生活経営学
これまでの主な研究：
・世代間交流を核とした学生の社会参画型教育プログラムの開発的研究
・定年退職者のボランティア活動とプロダクティブ・エイジング研究

2. 主な所属学会を教えてください。

日本福祉教育・ボランティア学習学会
日本NPO学会、日本生涯教育学会 他多数

3. 今、一番力をいれて取り組んでいることは？

・潜在的ボランティア希望者を活動に導くための条件設定と環境づくり
・高度な成果をめざす生涯学習機関における企画・立案過程の方法論の確立

4. 生涯学習研究所で取り組んでいきたいこと。

・地学連携による市内大学生向けの地域貢献プログラムの開発
・全国の市民大学プログラムの情報収集・分析・新提案
・シニアに向けた子育て支援（乳幼児・放課後児童）プログラムの開発と学習



渡辺 裕子
(短期大学部総合文化学科 准教授)

1. 専門の研究について教えてください。

・専門の分野は、建築計画、住居学です。安心・安全・快適な住まいやまちをどのように普及させるかをテーマにしています。
中でも高齢者、障がい者の方の福祉住環境の整備や、心のバリアフリーの普及活動の在り方を中心に、研究や実践に取り組んでいます。

2. 主な所属学会を教えてください。

・日本福祉のまちづくり学会 ・日本建築学会

3. 今、一番力をいれて取り組んでいることは？

総合文化学科では「地(知)の拠点整備事業」に取り組んでいます。その取り組みのなかで、学生と一緒に地域貢献の企画案を考えて、来年度から実践しようとしています。そのほか、福祉のまちづくりを進めるための市民活動も続けていて、今年で10年になります。「自然人も大切に」がキーワードです。

4. 生涯学習研究所で取り組んでいきたいことは？

生涯学習研究所は、地域の方たちのニーズを聞きやすいところだと思います。地域の方と触れ合うことによって、学生も育てられます。生涯学習研究所は、今後も大学と地域をつなぐ橋渡しの役割を果たせれば良い、と思っています。



上田 智子
(児童学部 児童学科 講師)

1. 専門の研究について教えてください。

教育社会学という学問が専門領域です。教育や子どもの育ちを社会との関わりで捉えようとする学問です。その中でも、女子や女性の教育や支援に関わることを自分自身のテーマとしています。女性がもっと生き生きと、もっと幸せに生きられる社会になるといいなと思いながら、研究をしています。

2. 主な所属学会を教えてください。

日本教育社会学会、日本教育学会、国際幼児教育学会、キャリア教育学会

3. 今、一番力をいれて取り組んでいることは？

研究においては、家庭教育の実態とその支援のあり方について関心をもっています。さまざまな教育改革のもとで、親たちが子どもの教育においてどのような不安や悩みをいんでいるか、聞き取り調査も行っています。社会的な活動では、住んでいる地域での子育て支援団体のネットワークづくりが10年目を迎えます。多様な個人や団体が、ネットワークを築き、継続することの意義を常に問い続けながら、活動を続けてきました。

4. 生涯学習研究所で取り組んでいきたいことは？

松戸市民の皆さんの声をたくさん聞かせていただき、松戸という地域にどっぷり関わりながら、女性支援とか若者支援といったテーマに取り組んでいければと思っています。





アートパーク7

みんなゲイジユツ化宣言

アートパークは、学生と地域の子どもたちが、アート=あそびを通してふれあう空間を創造するプロジェクトです。今年度も、聖徳大学と地域の子育て団体やまちづくり団体、行政が協働し、イベントを実施しました。

今年で7回目の開催となり、毎年楽しみにやってくる親子も増えているようで、気温30度を超える真夏日にも関わらず、1135名もの大勢の親子連れが松戸中央公園に集まりました。

今年度のワークショップは、「まつどのコックさん」「きのこロボット」「くるくるとぶつパレード」「まつどatelier・まつどmuseum」「お休み処 Museumカフェ」「おおきな世界」「空に向かってカプラ・KAPULA・カプラ!」「木っと、ともだち!」「☆もくもく製作所 ほしめぐり☆」「素材からのひらめき—アートとサイエンスは友達」…と、タイトルをみただけでもうきうきするような多彩なものがそろい、児童学科の学生が中心となり展開されました。

子どもたちはからだや感覚を使うことの心地よさを体験できたようで、絵具まみれ、汗まみれになりつつ、思いっきり楽しむ様子が見られました。学生にとっては、参加者をはじめ、地域の方と連携することによって、さまざまな年齢の方との接し方など、体験から学ぶことができる貴重な場でもあります。参加者からは「来年もぜひ参加したい」との声が多く聞かれました。今後も積極的にこのような事業に協力していきたいと思えます。



発行：聖徳大学生涯学習研究所

〒271-8551 千葉県松戸市松戸1169 聖徳大学生涯学習社会貢献センター 6階

電話：047-365-5691 E-mail: frontier@seitoku.ac.jp

ホームページ <http://tunagari.jp/>